倒置について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白坂, 昇 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11216

明治大学大学院紀要
第24集(4) 1987.2

倒置について

SUR L'INVERSION

博士後期課程　仏文学専攻58年入学
白　坂　　昇
NOBORU SHIRASAKA

この小論の目的は、ロラン・バルトの興味深いプルースト論、UNE IDÉE DE RECHERCHE[1]の中で披歴されたL'INVERSIONの考え方を紹介した後、それが他者との関係・相克をもっとも根元的な発条としていることを示すことにある。従って、主人公とアルベルチーヌとの恋が中心テーマになるだろう。

I

バルベックの列車の中で、一人ぽつりと座っている婦人が「両世界評論」を読んでいる。醜く、俗っぽい。話者は、淫売屋の女主人かと思う。が、二回目にはどかどかとのりこんできた「小グループ」が、その人こそ名家の生れ、ヴェルデュランのサロンの真珠であるシェルバトフ公爵夫人に他ならぬことを話者に告げる。絶対的に相反する二つの状況を、同一対象の中で結合させ、一つの現れを反対表象に転倒するというこの構図は、「失なわれた時を求めて」に頻出するものである、とした後、バルトは「スワンの恋」から例を7つばかり抜き出してる。

〔1〕 ゲルマントのいとこのうち、より快活な方が、他者に対して侮蔑的であり(公爵)、より冷酷な方が純真である（大公)。

〔2〕 取り巻き連の判断からすれば優れた女性であるオデット・スワンは、ヴェルデュラン家では馬鹿で通っている。

〔3〕 話者の両親をおどかしつけ、お宅の息子さんには才能がありませんね、と説きつけるほどに自分の権威をふりかざすノルポワも、ベルゴットにかかると丸で顔色なしである。(なにあれはおいぼれの青二才さ。)

〔4〕 同じノルポワ、王党派の貴族ノルポワが、急進派内閣の特別な外交任務を引き受ける。反動ブルジョワでさえ拒んだであろうし、ましてノルポワの過去、つながり、意見が決して許しはしなかったであろうその任務を引き受ける。

〔5〕 話者にこまごまと気を配るスワンとオデット。しかし、かつては、話者が苦心の、非常に説得力に富み、かつ完璧な手紙に返事を出そうともしなかった。それからというもの、スワン宅の門番

は親切なエウメニデスになる。

〔6〕 ヴェルデュラン夫人の二つのコタール評。

話し相手がほとんどコタールを知らないと思われる時は、コタールを持ちあげ、知っている時は、逆にコタールの医学的天才を茶化す。

〔7〕 偉い学者の本によれば、発汗は腎臓に有害であるが、医者のE氏によれば、暑気の利点は、発汗作用を促すことで、それだけ腎臓の負担は軽減されるという。

こういった表示法は枚挙にいとまがないほどで、互に非常に異った人間、オブジェ、状況・言語などに首尾一貫して適用されていて、その強迫性自体すでに謎めいているがとにかくディスクールの一形式として認知されるべきだ、とした後バルトは、これを暫時、倒置（L'inversion）と呼ぶことにしようと提案する。それらの一覧を作り、その言表作用の様態及び発条を分析し、プルーストの作品の実に様々なレベルにおいてそれが必ずとると思われる外延を位置づけることが将来の仕事として残されている。これが、バルトの言う〈idée de recherche〉（探求の概念）—同時に—（「失なわれた時を求めて」が働らかせている概念という意味なのであろう）である。しかし、これはあくまで一つの観念、方法でしかない。作品は無限の探求領域であり、その事が批評の仕事をある実証的成果であるより、むしろ補足的エクリチュールたらしめ、作品を pré——texte（前・テクスト）——（口実）たらしめるものなのであるとバルトは自己の視点を限定してみせたあとで、倒置が持っている三つの効果といったものをとりあげる。

最初に、モラリストのものである還元主義を排しておかねばならない。それは、現象と真実という俗な戯れを倒置の中に見出すにすぎぬ。ロシアの大公夫人、ヴェルデュラン家の賓客は俗悪の極めつきでしかない（ne～que)。そうなると、倒置とは、虚栄や社交界、スノビスムが表面として現出させている表象からの人間的真実の解放という解読作業・本質の探求を第一の仕事とすることになるだろう。しかし単なる還元にすると倒置の三つの味わい、効果を失うことになる。それらはディスクールの真実であって投企の真実ではない。

第一は、時間性、正確には時間の影響である。矛盾の二つの項は、時間によって、意外な出来事によって隔てられている。娼家のパトローヌとロシアの大貴族を読みとるのは、文字通りには同一の話者ではない。二つの列車がそれらを隔てている。第二は、極めつき（comble）である。倒置は厳密な文彩を媒介にして、恰も悪意の神—運命—が幾何学的に規定された正反対物へと大公夫人を一致させる道程を主宰しているかのようだ。プルーストが気に入っていたなぞなぞ遊びのようなのだ。娼家の女主人の極めつきなあーんだ？　ユドクシイ公爵夫人の付きそいになることさ。逆も真なりといった具合だ。第三は不意打ち、現れの転倒——現れから真実へのではなく——は、甘徒な驚きを話者にいつももたらす。不意打ちのエッセンス、真の歓喜、金的で、純粋で、勝ちほこるこの喜こびは、ただディスクールのエロチックにのみ依存していて、転倒の措写こそプルーストが書くことを享受していた時であるかのようなのだ。これは探求の大きな持続のあちこちに縫い合わされた剰余価値、レシ、言語の剰余価値の享受なのだ。

発見された快楽を、主体は反復する。倒置――形相としての――は「失なわれた時を求めて」全体に侵入する。レシそれ自体の始まりも正にそれである。スワンを経過して、全小説がそこからでてくる最初のシーンは、絶望（母の接吻を受けずに眠らなければならぬ）の喜悦（母と一緒に夜をすごせる）への転倒からなっている。プルースト的倒置の特徴はここでもいかんなく発揮されている。ただ単に母がとうとう（時間性）あらゆる予測に反して（不意打ち）息子に接吻しにやってくるばかりでなく（comble)、最もはげしい喜こびが浮かびでるのは最も暗い絶望の底からなのだ。厳格な父は、思いがけず慈愛の父に変る。転倒は細部の描写に限定されない。人物の転変もそうだ。貴族の仲間から、シャルリュスはヴェルデュランのサロンでただのプチブルになる。大公連の常客スワンも、話者の大叔母にとればくすんだ人物でしかない。娼婦オデットはスワン夫人になる。ヴェルデュラン夫人はゲルマント大公夫人になる。絶えざる配置転換は社交ゲームを転倒する。（プルーストの作品は、一般に言われているより社会学的なもので、昇進や階級移動の文法の厳密な描写である。）その度合いが激しいので、社交界は唯一つの形式で定義されうる。即ち転倒である。（地位や意見や、価値や感情、言葉づかいの。）

性倒錯は以上の点に関して範例的である。それは同一の肉体の上に絶対的反対物、つまり男と女を二重プリントするからである。すずめ蜂の場面でシャルリュス男爵の下に女性を発見するところは、相反物の戯れ全体の読解と理論的に等価である。同性愛は転倒のディスクールを展開する。それは、パラドクサルな状況、誤解、不意打ち、コンブル、悪意を世界に与える。又、範例的な転倒であるので不可避的な膨張運動によっても動かされている。作品全体をカヴァーしている長い、歩みは遅くとも必至の曲線を描いて人物達は出発点のヘテロセクシャルからホモセクシャルに転倒される。（サン・ルー、ゲルマント大公）世界に蔓延する倒置の病い。転倒は一法則だ。すべてが、無慈悲な転回によってひっくり返される。貴族的な言葉使いをしていたスワンは、それをブルジョワ風の言い方にある時期転倒せざるを得ない。この転倒の強制力は、法則なのだから、風習を観察する必要などないくらいだとプルーストは言っている。

転倒の解読は一つの知識の獲得に他ならぬ。ここで注意しなければならないのは、この知識が内容を裸形にしはしない、あるいは少くともそこにはとどまっていないということだ。注目されるべき（法則的なの）は、ロシアの大貴族が俗っぽいことでも、ヴェルデュラン夫人のコタール氏評が、相手次第で変ることでもなくて、この読解の形式、社交界を構造化している転倒の論理そのものなのだ。つまり社交界を社交界たらしめているものなのだ。転倒それ自体は、方向を持たないことに留意しておこう。それを止めることはできない。交替する両項のどちらも他方より真実なわけではない。

コタールは偉大でも小人でもなく、彼の真実とは、大文字の他者の言葉が彼に蒙らせるところの揺れ全体に引き伸ばされたディスクールの真実なのだ。古典的なサンタックスなら、シェルバトフ大公夫人は、娼館のマダムにすぎぬというところを，プルーストは共存的サンタックスをもって代え、大公夫人は、娼館の女主人でも又あるのだという。新しいサンタックスだ。メタフッリックと呼ぶべきだろう。というのも修辞学が長らく思いこんできたところとは反対に、隠喩とは、およそヴェクトル

というものを欠いた言語の働きだからだ。一方から他方にいくとしてもぐるりと循環し、しかも永遠に続くのだ。プルースト流の倒置のエートスが不意打ちである所以である。それは回帰の、接合の、再発見の驚きである。対立した事を言表することは、結局テクストの、エクリチュールの旅の統一性の中でそれらを結合させることなのだ。

従って、二つの散歩の方向とロマンの分割（「スワンの方」「ゲルマントの方」）の共通リズムである一つの大きな対立は、偽りではないにしても少くとも取消し可能なのだ。話者は、驚愕をもって二つの散歩道がつながっていること、スワンの世界とゲルマントの世界がさまざまな縫い合わせを通してジルベルトの中で一致するのを見ることになる。しかし、倒置がもはや機能しなくなる時がくる。老年の中に凍りついてしまった人々が「見出された時」に出てくる。残余の生の中ではもはや倒置はおこらない。レシは終らざるを得ず、書物は始まらざるを得ない。

II

「囚われの女」に出てくる倒置の基本的シェーマは、嫉妬とその鎮静の交替である。「囚われの女」全体がその交替の記述のヴァリエーションで覆われているといっても過言ではない。全体の3分の1ほどをしめているヴェルデュラン家のコンサートの場面も、鎮静という地がなければありえぬものとして描かれている。残りの3分の2は、突然の苦しみとその鎮静の交替の記述及び分析、鎮静が苦しみから、かすめとってくる時間の中での夢想からなっている。従って倒置の両項はどこから引用しても同じ本質を持っている。最初の方と最後の方から任意にひろいあげて、苦しみとその鎮静との範例としよう。

〈ある女の視線がたちどころにもう一人の女に理解され、二人の飢えた女を近づける。巧妙な女なら見ないふりをしながら、五分後には勘づいて横町で自分を待っている相手に近づき、二言三言で待ち合わせの約束をすることができる。何が起こるか知れたものではない。そしてアルベルチーヌにとってみれば、こういったことを続けるために、私にパリ付近の気に入ったこれこれの場所へまた行きたいということくらいいとも簡単だった。だから彼女の帰りが遅かったり、散歩がばかに長引いたりするだけで……私の苦痛はたちまちよみがえって今度は別のイメージに結びつき、それを私はバルベックのイメージと同様にぶち壊そうとするのであった。〉[2)]

〈歩道からアルベルチーヌの部屋の窓が見える—以前彼女がこの家に住んでいないときには夜になると真っ暗だった窓、それが今では室内の電燈の光、太い鎧戸の桟で細かく仕切られたこの光に照らされ、上から下まで金色の横縞がつけられている。このわけのわからぬ魔法の書物も私にとっては明白な意味を持ち、平和な私の心にすぐ手近にあるかずかずのイメージ——これから私がわが物とするイメージ——をくっきりと描き出していたが……私が見上げるこの光の縞は私以外の者だったらただそれだけのものとしか思わないだろうが、私はその後ろに、他人には思いもよらない宝物を隠しており——これら水平の光はその宝が発散しているのだ——、その宝にあらゆる意味をこめたために、光の縞も極端な実体、充実、堅牢さを帯びることになったのである。しかしその宝物と引きかえに私は

自分の自由、孤独、思考を売り渡してもしまったのだ。〉[3]

苦しみの方は全て急性のもので、ただちに破壊されなければならぬものとして常に現れる。その強迫的な性格はいくつかの場所で指摘されている。

〈何としても彼女がトロカデロでこの旧知の女に会うのを妨げ、あるいはこの未知の女と知り合うのを邪魔しなければならない。〉[4]

ただ、現実的な手段を持って疑惑や不安を阻止できない場合には、この強迫性は自家中毒を起こす。

「相手がびくびくしながら言った言葉もうっかり聞き過してしまう……その疑惑はちょうどある種のいらいらした精神状態のときに、果たして自分が門をさしたのかどうか、五十度繰り返しても最初のときと同様にあやふやであるような、そんな疑惑によく似ている……」[5]

疑惑は強迫的に打ち消さればならぬものとしてあるばかりではなく、又想像力を狭い枠にとじこめるものとしても作用する。トロカデロの場合でもレアだけが問題なので、その他のチャンスには注意が働らかない。この疑惑が持っている想像力限定の力を強度と呼ぶことにする。疑惑は強度さえ満たしていれば何でもそれを惹きおこすことができる。新聞で読む記事、ある視線、ついもらされた言葉、嘘の発見、突然思い出された過去の出来事、相手に感じられるある頑な拒否 etc.

〈「どうして彼女は接吻してくれなかったんだろう？」すると私の胸はきりきりと痛みはじめる。それから再びさきほどの理屈がむし返されて心は多少静まるが、そのうちに思考が絶えず同じ動きを単調に繰り返しているので、私は頭が痛くなってしまう。私は……狭いところをうろうろしていた。〉[6]

不安と疑惑の持っている強迫性と強度をさしあたり指摘しておいて、不安の鎮静の方に移ろう。まず鎮静という言葉からして、それがネガティヴなものであることがわかる。

〈恋人のもたらしたこの安らぎも結局は喜こびというよりむしろ苦しみの鎮静だった。〉[7]

この鎮静は、最初の衝撃のあとでしゃにむにアルベルチーヌをバルベックからもぎ離し、パリで監禁同様の生活に押しこめるのに成功した当座は甘美な喜こびとして、

〈彼女はその舌を私の口の人にそっと滑りこませ、それがまるで日々のパンのように滋養ゆたかな食べ物——私たちを苦しめる肉体が、その苦しみによって一種の精神的な甘美さを与えられ時の、ほとんど神聖ともいえる性格を備えた滋養ゆたかな食べ物——のように思われた……〉[8]

その幽囚の生活が、習慣化されてゆくにつれて、幾分重苦しいしかし、家庭的ななごやかさとくつろぎを持ったものとして、

〈いっそうたしかな落ち着き、もうすぐかたわらにやって来る恋人の避けることのできないうるさい存在、だが甘美なその存在は、いわば満たされ安定を与えられた落ち着きであり、家庭的感情や団欒の幸福から生まれるものだった。〉[9]

不条理な不安に存分に引きずりまわされた後は、神経の反発として、

〈苦しみが消え、それとともに苦しみを鎮める必要もなくなると、私はたちまち残酷な気ばらしのように全注意力を集中して、彼女は私にとって無にひとしく私は彼女にとって無であるにちがいないと感ずるのだった。〉[10]

又自分の現在の生活に対する比較的客観的な反省として、

〈私は……これまで自分が閉じこめられていた習慣的不安の状態をとびこえて自由な空気の方へと動きはじめる。そこから眺めるに、アルベルチーヌが他の男と結婚するのを妨げ、彼女の同性に対する嗜好を邪魔すべくいっさいを捧げるのは……私の目にも気違い沙汰と思われるのであった。〉[11]

時には疲労を与え、他の欲望の実現を妨げるものとして、

〈アルバルチーヌが出て行くと私は四六時中彼女がそばにいるのはなんと気疲れがすることだろうと感じた。〉[12]

〈アルベルチーヌとともに暮らしていてヴェネチア行きも旅行もできないにせよ、せめてもしさきほど私がひとりだったら、今日の日曜の晴れた日ざしのなかに散らばる若いミディネットたちと知り合いになることもできたろう……〉[13]

といった風にいくつかのニュアンスを持って描かれている。このことが、不安の単調で急激な性格と対照をなしている。ただ不安がとにもかくにもおさまっていることを共通のメルクマールとしていることは、最後に引用した幾分通俗的な、アルベルチーヌのために味わえない欲望という考え方が十分相対化されていることからもうかがわれる。

〈もしアルベルチーヌが私とともに暮らしておらず、自由の身であったなら、私はこの女たちのことごとくが彼女の欲望や快楽の対象になるかもしれない、おそらく対象なのだろうと想像したはずだし、またそれは正しい想像だっただろう。……だがアルベルチーヌが私の言うなりになったので、私はもうこの女たちのために苦しまなくてもすむようになり、彼女らは世界の美へと復帰したのである。〉[14]

さてこの倒置の根底をなすものは一体何なのであろうか、前述のバルトの示唆に従って倒置の三つの効果とからめながら論じたいと思う。まず不意打ちについていうと、不安が持っている不意打ちとしての性格は、前述の強迫性、強度からして明白である。次に時間性についてみてみる。バルトはシェルバトフ大公夫人の乗る二つの電車が時間的に区別されていることをもって、つまり彼女についてのAという表象とその反対表象が異なった時に与えられていることをもって時間性としている。これは嫉妬とその鎮静についても言えることである。嫉妬に領されている時には、何が何でもアルベルチーヌに慰められたい、それがだめでも疑われた嫉妬の原因を阻止するために彼女の自由を奪い、監禁しなければならないという切迫した気持になると同時に、世界は貧困化され、疑惑をめぐる限定された表象の思念がそこでぐるぐる回転する空虚のごときものになる。嫉妬がどうにかおさまると、アルベルチーヌがのべつくまなくそばにいるのはやり切れない、監禁されているのはむしろ自分の方だ、世界がこんなにも美しく、素晴らしい天気なのに旅に出かけることもできない、未知の魅力をたたえた娘たちのどの一人とも知り合いになることさえできないという風に話者は感じるのである。

相反する感情が別々の時間に配されていることは当然であるが、この倒置は、むしろ相反する感情こそ世界に異なった相貌を与えるものであり、世界の相貌の変化は時間に他ならないことを示している。この倒置が単に範例的である以上の意味を持っているのは、これから述べるように時間を産出し

再生産するラディカルなリズムを模したものに他ならないからである。

〈愛とはおそらく何か強い感動があった後で、なお魂をゆり動かす波紋のひろがりにすぎないのだろう。〉[15]

この場合の強い感動とは、

〈バルベックの汽車のなかで少女時代のアルベルチーヌの話を聞き、おそらくはときどきはモンジューヴァンを訪れたであろうことを親った瞬間に私が感じた苦しみ……〉[15]

を指している。話者はアルベルチーヌの悪いつきあいを一ぺんに破壊しようとして彼女をバルベックから引き離し、パリで同じ屋根の下に暮らすようになる。苦痛は治まる。これが、アルベルチーヌとの関係の根元的リズムを規定する。慢性的な病いに擬された苦痛の再発と小康状態の取り戻しはこの原初のリズムに従う。バルベックの海岸で知り合ったアルベルチーヌの様々なイメージが、パリのランプの下でのアルベルチーヌと遠く隔たっているがゆえにアルベルチーヌと話者の関係が変化し、時が経過したことが感受されるというよりも、根源的な切断がそれ以前のアルベルチーヌとそれ以後のアルベルチーヌを切り離したことが時の始まりであり、又反復としての時の母胎なのである。

〈一人の人間にかんする苦悩の一時、その人を引き留めうるが逃げられてしまうかという不安、そこから一つの愛が生まれた場合、この愛はそれを創り出したはげしい心の動揺の痕をとどめ、それまで同じ人物を考えるたびに目に浮かんだものはほとんど思い出しもしなくなる。〉[16]

波打際での印象と、パリでの生活の印象をくらべて時の経過をはかるものとするためには、花咲く乙女たちの中の一人がパリで籠の鳥のような生活をするようになったことに驚くためには、突然の心の動揺以前のアルベルチーヌと以後のアルベルチーヌを同じ時系列の二つの点たらしめるためには、不安と鎮静のリズムそのものをもはや生きていないことが必要であり、他の時、おそらく認識の時に入っていることが必要である。

この根元的リズムには、前史があり、そのようなものとして話者によって想起され定着されている。「スワン家の方へ」に出てくる有名な接吻をめぐるエピソードである。ここではあまり引用されない、しかし重要でアルベルチーヌとの恋と完全にパラレルな箇所を少し長いが引用しよう。ゲルマントの方への散歩の後は、夕食の時間が遅くなるので、一人での食事のあとすぐに寝にやらされ、母はおやすみを言いにあがってこないだろう、と考えながら主人公は空をみあげる。

〈私がいまはいりこんだこの悲しみの地帯は、私がほんのすこしまえまでよろこび勇んで突きすすんでいた地帯からはっきり区別されていて、夕焼空で、ばら色の帯が、一線をひかれたように、みどりの帯または黒い帯からへだてられているのとおなじほどきわだっていた。一羽の鳥がそのばら色のなかをとんでゆくのが見える、もうそのはてに達しそうだ、ほとんど黒にふれるばかりになり、やがて黒にはいってしまった。さっき私につきまとっていた欲望、ゲルマントに行きたい、旅行したい、幸福になりたいという欲望から、いまはすっかりそとに出てしまったので、たとえそんな欲望が達せられても、すこしも私はたのしくなかったであろう。ママの腕の中で夜通し泣くことができるなら、そんな欲望をみんなすててしまってもいいのだ！　……そのようにして私がある時期にわたって私の

なかに継起するそんな心の状態を見わけることを知るようになったのは、ゲルマントのほうにおいてなのである。また私のなかに継起するそんな状態は、たがいに一日をわけあうまでになり、あたかも発熱時間のように正確に一方があらわれて他方を追い払うのだが、そうした状態はたがいに隣接しながら、それぞれ外壁でへだてられ、相互のあいだに流通の方法が全くないから、一方の状態で私が欲望をもったもの、おそれたもの、なしとげたものを、他方の状態で私が理解することはもちろん、想像することさえできないのである。〉[17]

アルベルチーヌの場合との平行性は明白である。倒置、互に相手を見知らぬような自我の二つの状態、病気の言葉で表現された反復性、世界の膨張と収縮、収縮の持つ強迫性と強度、膨張が魅力を与える遠方、何もかも同一である。異なった二つの状態の確認がなければ変化というものもないだろう。だが、同一の何ものかがなければあるものについての変化とはいえないだろう。バラ色の中を飛ぶ同一の鳥が黒い帯に入って行くのである。

ここで時間の誕生が、他者との相克を軸としている事情について考えてみたいと思う。引用によれば、自我の分裂の自覚は、母との一体感を確保できるかどうかという不安を軸としている。主人公はすでに複雑な心の働かせ方をしているので、対自性がその時に始めて生じたとは信じにくいが、他に記述がないので、恐らく幼年期の反復に他ならないドラマを精神誕生のドラマとして読んでよいと思う。

最初に母との全一的な一体感がある。やがて母との分離を生きざるを得なくなる。

〈夕食後は、悲しいことに、まもなく私はママのそばを離れなくてはならなかった、あとに残って他の人たちと雑談をするのだった。〉[18]

このことには何の不思議もない。いわゆる子供に手のかからなくなった母親は、自分の時間を再び持つようになる。母親がのべつ注意を子供に凝らす必要のない時期に入ったのだ。ただし、一体感を再び感じさせる接吻だけは、一つの神聖な儀式として確保されている。

〈寝にあがってゆくときの、私の唯一のなぐさめは、やがて私がベッドにはいったあとでママが接吻をしにきてくれるだろう、ということであった。しかし、そのおやすみはほんのわずかしかつづかず……それはやがてそれにつづく瞬間、彼女が私から離れ、ふたたびおりていってしまう瞬間をつげていた。だから私は、そんなに自分の恋しいその幸福が、できるだけおそくやってきて、ママがまだやってこない猶予の時間が長びくようにと願うようになった。〉[19]

これは後に起こる自我の分裂の自覚の予告としての、ある時間性の操作である。ただしこの場合は、いわば即自的に感受された分裂だと云うことができる。つまり接吻の甘美さと、その須臾性の感覚を前もって予測しおいしい物をあとにとっておくような心の働かせ方を生きているのであって、そのことを自覚的意識にはもたらしてないように思われる。対自的な意識として完備するのは、このいわば最後の砦の崩壊をも是認することができてからの事だ。客のある時には、主人公は早く食事をし、八時までは皆との同席を許されるが、八時になると盗みとるような接吻しか許されぬまま寝なければならないことになっている。その時の心の働かせ方は次のようなものである。

〈あっというまに逃げてしまうあのくちづけのなかで、自分だけがやれる動作を先にやっておこう、自分が接吻しようとする頬の位置を目でよく選んでおこう、そしてそのように精神でくちづけに着手しておくことによって、……ママが与えてくれる瞬間のすべてを充当して私の唇に彼女の頬を感じることができるような、そんな心の準備をととのえておこう……〉[20]

ところで祖父と父は定刻より早く下人公り寝室にあがらせる。主人公は不意を打たれるが、とにかく接吻しようとした時に、食事の鈴がなり、そんなぐずぐずおやすみを言うものではないと父に邪魔をされてしまうのである。これは、母と一緒にいつもいられない悲しさを、心を様々操作させることで、一回の儀式の中にまぎらわせてきた主人公にとっては、契約違反のようなものとして感受されるはずである。これは、対母親ということではまさしく契約違反であるが、主人公にとってはある意味で、止むを得ぬこととして感受されている。何故か？　ここで母という最初の他者が持っている二面性を論じなければならない。

まず第1は、母体としての母ということである。二人で一人という矛盾の実在である。もう一つは、主人公が母体からの切り離しという数多くの経験の累積を通して、その母子一体感をただ一日一回の儀式に還元してきたことと相即する母の他者性である。つまり、子供を一人立ちさせるという任務を世間という他者たちの世界から託されている母親である。話者の言葉でいえば母は、原則を持っているということになる。

〈意志の欠乏、虚弱な体質、それらが私の将来に投げかけていた不安〉[21]

にもう一人の母である祖母は、心を悩ませ、

〈神経的衝動に負けてそこに陥るという点に共通の性格をもっている、そういう過失〉[22]

を母は認めまいとする。こんな風では将来を生きていけないと思うがゆえに、あえてする拒否、それが原則である。

就寝前の儀式としての接吻の拒否は、それまでの似たような状況での母子一体性の拒否と同じ本質をおそらく持っているが、ただこの場合は、最後のもの、それまでとそれ以後を決定的に分ける事件として主人公の記憶に残ったのであった。なぜなら、それがために母殺しの表象を呼びこむほどの強度で話者の反発を惹起したからである。又その反発が思いがけず父母から許されたことでも記憶に残ったのだった。これは、倒置の自覚の端緒であるとともにその統覚の仕方、その後の反復を支配するリズムを規定するものなのである。

その晩の神経的衝動は、嘘にはじまり、ゆすりを経過し、一種の殺人で終る犯罪として描かれている。どうしても母の接吻を手に入れようと決心した主人公は、手紙では言えないことがあるので二階にきてくれという嘘の手紙を女中フランスワーズに託し、更に彼女には、母が返事をよこすように言ったのだと嘘を重ねる。フランスワーズはこの嘘をすぐみぬく。彼女が主人公にむけるのは常識的な世間がむける視線であり、又主人公の衝動にさえ仕えねばならぬという腹立しげな表情でもある。この意味での他者性を彼女は小説全体を通じて保持するだろう。これは功を奏さず、主人公は自力での突破をはかる。二階にあがる母を待ち伏せしようというのだ。母が来るのが聞こえる。

〈私はそっと廊下に出た、心臓が非常に激しく動悸をうつので前に進むのが困難だった……私はとびついた。最初の瞬間、彼女はびっくりして私を見つめた、何が起こったのかもわからなく。ついでさっとこわい顔をした、ひとことともいってくれなかった……〉[23]

ついで父親のあがってくるのが聞こえる。

〈そこで父と私とのあいだにいざこざが起こるのを避けるために、腹立しさで声もきれぎれにいった、「逃げなさい、逃げなさい、気違のようにこんなに待っているのをせめてお父さまに見つからないように！」しかし私は母にくりかえすのであった、「おやすみを言いにきて」〉[23]

父が来るのにおびえながらも、同時にそれを

〈ゆすりの手に使い、ママがつづけて拒むなら、私がまだ起きていることが父にみつかるので、それを避けるために、「あなたのお部屋にお帰りなさい、あとで行ってあげるから」といってくれるのをあてに〉[24]

するのである。こわい顔をするのは、原則を持った他者としての母である。一方、子供との共生をひきずってもいるので、母は、まるで共犯者のように掟破りを陰蔽しようとするのである。この二律背反こそ、ゆすりが成立する根拠である。ところが、思いがけず父は、母が子供と暫く過すことを簡単に許してしまう。母は規範の方に再び揺れる。

〈それではいい習慣はつけられません、この子に……〉[25]

父は、

〈まあ、そうむごくしないでおこうよ！　病気にでもしてごらん、あなたのやりすぎになるよ！〉[25]

と答える。これで、結局主人公の神経衝動は是認される。父が去った時、主人公はもちきれなくなってすすり泣きを始める。その理由をフランソワーズに聞かれた母は、

〈この子自身にもわからないのよ、フランソワーズ、神経が立ってるのね……〉[26]

と答える。これで主人公の行為は、無意志的な病気であり、その病気は主人公に責任がない神経症状ということにされる。主人公は喜こんでいいはずだった。ところがちっとも嬉しくない。

〈私にはこんな気がした、私がいま勝利をえたのは彼女にさからってであり、病気、悲嘆、または年齢でそうさせることができたように、私は母の意志を鈍らせ、母の理性をよわめさせることに成功したのだ。〉[26]

自分の行為が病気や悲嘆、年齢、つまり他者を老いさせ、やがて死に追いこむものと感じられたのである。これが、ドラマの全体である。これは一回的な出来事として描かれている。母の原則は、その時敗北を喫するが、いわば母の悲しみを代償として主人公に受けいれられていくのである。主人公は接吻が与えられなくてもパニックをおこさず、耐えることを覚えるだろう。自我の分裂は即自的には、日内の気分の変動それ自体（母との一体化をしか思わぬ時は、その一体化の瞬間への操作）を生きることであるが、それは窮極的には、母との分離をそこにそのようにあるものでなく、そのようにあるべきものとして押しつけてくる規範を受入れることで、対自性に転化すると考えられる。

母子一体からの切り離しは、母の方からの規範の押しつけとして（これをしてはいけない、これは

よいことです）始まるわけだが、これを主体が自分の方から引き受け直すことこそ、対自性の根拠をなすものと考えられる。あるいは時間的な表象でなく、空間的な表象を用いるなら自我の分裂の自覚と、分裂の妥当性の意識は切り離せないといってもよいかも知れない。母は夜、枕元に来ないかも知れない。

〈私は死んでしまいたかった。そしてその状態は朝まで続くだろう、そのとき、朝の光は、私の窓まではいのぼっている金蓮花に被われた壁に、庭師のように、その梯子をよせかけ、私はすばやく庭におりるために、ベッドからとびだすだろう、朝になるともう私はその夕方母にわかれる時間がふたたびくることを忘れているだろう。〉[17]

忘れている時間は長くなり、やがて就寝前の接吻という子供じみた習慣への固着も影をひそめて行くだろう。しかし、接吻したいという望みは姿を変え、相手を変えても生き残るであろう。エロス的な一体感への欲求は、何らかの形で満足させられなければならないように、人間はできているからである。しかし、その欲求が社会的規範による限定を受けなければならぬということに関して、主人公は社会が禁忌とするところに戦いをいどみ、部分的に勝利を治めるのである。神経的衝動を武器にもぎとられた、規範を破るものとしての母親との一体感がそれである。

社会が欲望の流れを導く正にその高地で反社会的なエロスを貫徹させようとする主人公の欲望は、窮極的には、母親殺しの表象を呼びこむとしても、従って、鬱的なものに導くものであっても、この衝動をそれとして把握し、その論理的帰結まで追求したことはプルーストの不滅の功績である。

アルベルチーヌの場合にただちに移ろう。

バルベックの汽車の中で、アルベルチーヌの言ったことが、モンジューヴァンの同性愛の場面と結びつく。母との接吻をめぐるエピソードの場合と同じく、一体感が破られる危機に際してパニックが起きるのである。この一体感の本質は何だろうか？　嫉妬とは、という箴言めいた言い方は、「囚われの女」の随所に出てくるし、ルネ・ジラールの欲望の現象学に多くの素材を与えてもいるものなのだが、ここでは、政治的支配という観点から、嫉妬を定義したものを取りあげよう。

〈嫉妬とは多くの場合、圧制に対する不安な欲求を、恋にかんする物事に適用させたものにほかならない。自分の最も愛している人々が安心しきって希望の揺り籠にゆられていると、その安心がまやかしであることをみせつけて脅かしてやりたいという勝手な欲望がむらむらと私にわいてくる…〉[27]

支配と服従、これが嫉妬という他者との関係を規定する用語なのだ。この場合、一番大事なのは、相手の欲望を正確にみぬくことだ。しかし、主人公が嫉妬深いことを、相手は知っているので絶対に本当の事はいわない。以前は、アルベルチーヌはいろいろ本音をはいていたのに、今は口を固く閉ざしている。今は、相手の表情や、表情のように解読される言葉を通じて相手の嘘をみぬかねばならない。そして事実、嘘は時々ばれるのである。たとえば主人公はバルベックへの3日間の旅について知っているのだと嘘をつく。本当は往復だけで精一ぱいのはずだし、運転手も一緒なので悪いことができるはずもないとすれば、かまをかけて本当の事をいわせるにはまずい例だと思いついた時に、アルベルチーヌは、

〈バルベックには行かなかったって言いたいんでしょ？〉[28]

と驚くべき告白をする。そこには行かなかったというのだ。話者はうちのめされる。このパターンは何回も繰り返される。嘘をつくのは恋人だけではない。主人公が何としてもアルベルチーヌをバルベックから引き離さねばと思った時も、恋人のことでつらい思いをしているから慰めて欲しいと嘘をつく。この原因は、アルベルチーヌとヴァントゥイユ嬢の友達との関係を聞いたことであった。ところがそれが、自分が音楽通であることを示して主人公の興味をひこうと思ってついたアルベルチーヌの嘘だったという告白がある。

この告白の前にも主人公はそれをひきだす嘘をついている。更に主人公の次のような確信が彼の嘘に拍車をかける。

〈幼いころ私が恋愛のなかの最も甘美なものとして夢見たこと、まさに恋愛の本質と思ったこと、それは愛する女にむかって、こちらの愛情や、相手の好意への感謝や、永久に二人でいっしょに生活したいという欲望を、思いのまま打ち明けることだった。しかし私は自分の経験や友人たちの経験によって、このような感情の表現がとうてい相手に伝染するものでないことを、わかりすぎるほどに理解してしまった。〉[29]

何としても欲望を隠さなければならない。あるいは、自分の望むものと反対のことを言わなければならないという原則を主人公は経験から引きだす。この原則を他者に投影すると、他者が嘘をつくからには何か隠したい欲望があるからだということになる。ところで嘘はごく自然なものだとも話者は言う。

〈ふだん体が弱いのにそれを隠して強く見せようというにせよ、悪癖を陰蔽するにせよ、他人の気を悪くさせずに好きなものに向うにせよ、嘘以上に日常的なものが果たしてあるだろうか。嘘は最も必要で最も広く使われている身を守る手段である。ところがまた嘘こそは、私たちが愛する女の生活から追放したいと思うもの、秘かに探り、かぎまわり、いたるところで憎むものだ。〉[30]

嫉妬妄想は、このよくある嘘すべてに、隠された欲望を嗅ぎつけるまでに高められた嫉妬である。嘘の他者への投影の他に欲望の投影がある。話者は正確に分析している。

〈それでも私がどこまでも恋人に忠実だったら、不実さというものを想像することもできないために、私は不実に苦しむこともなかっただろう。けれどもアルベルチーヌのなかにたえず私が想像して苦しんでいたのは私自身の欲望だった。……ブーローニュの森でテーブルについていたサイクリングの少女たちをちらとながめずにはいられなかったあの目つき、それをアルベルチーヌに想定してみることであった。〉[31]

これはエノンシアションの位相からもらされた述懐であるが、主人公はエノンセの主題として嫉妬を生きるのをやめない。アルベルチーヌの欲望が同性愛かも知れぬということが、主人公の欲望の投影に限界を与えている。というのも、何をどんな風に欲望しているかについての一般的シェーマを与えてくれぬからである。プルーストの同性愛の記述それ自体が持っている射程については、昨年度の紀要論文でとりあげたが、このアルベルチーヌの同性愛は、記述を豊富にするものというより、他者

の欲望のとらえ難さの比喩のようなものである。

とにかく、支配の欲望は、投影のメカニズムによって疑われた他者の欲望を阻止する欲望だったのだ。この場合の他者との一体感は、相手の全体的所有に帰着するだろう。これは、消極的な儒教倫理「人にして欲しくないことは、人にもするな」の転倒である。他者に嘘や欲望を禁じておいて自分は思うさま嘘や欲望にふけろうというのだ。消極的な倫理さえ破っている以上、それでは生きられないとアルベルチーヌが思って当然であることに主人公は気づく。あるいは、反倫理の支配欲望が現実には貫徹していないことに、といってもよい。何故なら、現実に二人は一緒に生活しているからだ。他者の欲望を阻止するといっても、その欲望が自己に向けられていることだけは排除しないからだ。アルベルチーヌが出ていってしまう前に、現実的な支配形態で満足するべきだ。

〈私が求め、そこに休らったイメージ、そのかたわらでなら死んでもいいと思ったイメージは、……はるかな世界を反映させるのでなく、ただ私とともにいたい、私そっくりでありたいとしか願わないアルベルチーヌ――実際そのとうりだと思われる瞬間もあった――、未知のものでなく、まさに私の所有物としてのアルベルチーヌなのであった。〉[32]

これはナルチシズムの満足という形態をとった支配である。物を所有するということは、自我の空間的拡張である。その時、物と自我は正に一体なのだ。物を人間にするにあたって、自らを讃美させる魂だけを与えようというのがナルチシズムなのである。

〈私が買い与えるドレスやヨットやこれらはすべて……一つ一つが私の行使する特権のように思われた――主人の義務や役目はその権利と同様に主人の支配の一部をなし、支配とは何かを定義づけ、それを証明しているからだ。〉[33]

奴隷の感謝は、この支配の剰余価値のようなものであって本質ではないとでも言いたげである。自足の上に漂っている幸福の時を経過すると、倒置のメカニズムが又働らく。ミディネットに目がいく。相手に自分を売り渡してしまって自分の時間も持てない、仕事もできないという気持になる。これが反転するのは感謝が得られるどころか、相手の従順さがなくなる時である。この相手の変化は、自分の気持の変化が呼びこんだものに違いないのだ。倒置の悪無限は、反射の悪無限と切り離せないからである。

〈ところがある時突然、自分が奴隷だという意識は私を悩ませることを止め、この状態をもっと続けたいと願うような気になった。アルベルチーヌも自分を奴隷と感じているのが見てとれたように思われたからだ。なるほど、私の家にいていやではないかとたずねるたびにきまって彼女はどこへ行ってもこれ以上幸福なところはないと答えるのだった。けれどこのような言葉と裏腹に、彼女はよく何かを懐かしむ様子、いらいらした表情を見せていたからである。〉[34]

愛する女の同意が、無理やり獲得されたもののように感じられて、主人公は悲しくなる。出ていく可能性が彼の頭から去らない。しかしそれだけは主人公は耐えられない。ナルチシズムの満足はえられなくても、妹にするような接吻だけで自分は満足だ、うちあけてさえくれれば同性愛を許してもいいとまで思いこむ。しかし、原則に従って、どうしても君が必要だといってはならない、むしろ反対

にもう別れる時だというおどしをかけて、相手をひきとめなければならない、と主人公は大芝居をうつ。主人公は相手が不幸にみえるし、自分は相手を愛していないのだから、別れた方がいいと言う。彼女は答える。「いいえ、あたし、ちっとも不幸じゃなかった。これから不幸になろうとしてるんだわ」[35]。それでは、同居をのばしてみようと主人公がいうと彼女は喜こぶ。そして「少しはぼくのこと愛してる？」と聞く主人公に、アルベルチーヌは「前より百倍も愛してるわ」[36]と答えるのである。

この言葉を引きだすための芝居だったわけだが、ここで支配のドラマは、絶対的な圧制から、ナルチシズムの満足を経て、プライドを捨てるか捨てないかという場所へと移行している。主人公は愛しているといわないで欲しいものを手に入れ、アルベルチーヌは、愛されていなくても、主人公が認めるなら喜こんで、同居を続けること、愛しているのは自分の方だということ表明しているからである。或る朝、突然、アルベルチーヌは出ていく。その理由をあれこれ主人公は考えるのだが、本当のところはわからない。アルベルチーヌの気持の描写はないからである。

結局、主人公は自分の欲望を相手に投入することしかできない。つまり、アルベルチーヌは、別れるとおどしをかけて自分の欲するもの、つまり主人公との同居、できれば自分の他の欲望を認めさせる形での同居を欲しているのだ、と主人公は考えるのだ。主人公は、何が何でも相手を取り戻したいのだがこの場合でも、自分がそれを真実望んでいることだけは言明したくない。様々策を弄した後、主人公は疲れはてて原則をかなぐり捨てる。

〈私はアルベルチーヌに対して、一切の自尊心をすててしまった。どんな条件でもいいからもどってくるように、彼女の好きなようにしていいから、ただ週に三回寝る前にちょっとでいいからキスしたいのだとたのむ絶望的な電報を打った。〉[37]

入れちがいに彼女の死の電報がとどく。主人公がその時もぎ離されたのは、何はともあれ一緒に暮らしてきたという事実である。習慣である。その中で、嫉妬による倒置が繰り返されたのだった。習慣はすぐに消えない。しかし相手はいない。嫉妬は続く。その鎮静は得られない。接吻で慰めてくれる彼女はもはや存在しないからだ。鎮静の代りになるのは、彼女の死後現に生きてきたという事実の累積としての習慣の形成だ。これがアルベルチーヌの物語の終りである。支配の欲望が行きつくところである。

〈愛とは、おそらく何か強い感動があったあとで、なお魂をゆり動かす波紋のひろがりにすぎないであろう。〉[15]

今までとりあげてきた神経的衝動も、突然の支配の衝動も主人公が自ら選ぶことのできなかったものだ。このパトスは、他者からの分離の危険に対する叫びのようなものだ。その根拠はフロイト流のエロス・タナトスの弁証だろうか、ルネ・ジラールの形而上学的欲望だろうか、ドゥルーズ＝ガタリのいう分子的欲望の流れだろうか？　いずれにせよ、物語は、この根元的不意打ちが与えた感受性の刻印、自己というものを誠実に辿りなおしているようにみえる。

最後に（comble）について触れておこう。

シェルバトフ夫人のコンブルは、他者に伺候するという同一性を使っての反対表象の戯れである。

たくさんのコンブルが出てくるが、肉体についてのコンブルを取りあげよう。眠れるアルベルチーヌは肉体の極である。

〈もはや彼女は草や木の無意識の生命、私の生命とはいっそうかけ離れた、異様な、にもかかわらずいっそう私のものとなった生命にすぎなかった。〉[38]

これは、支配の欲望がはぐくむ絶対的所有の夢のようなものである。この夢を実現しようとしてアルベルチーヌは閉じこめられたのである。他人から切り離せば、それは得られると主人公ははじめ考えたのだ。しかし、最大の現前は、最大の不在に出会うのである。

〈人は自分の体を見ることができないが、他人はそれを眺めている。人は自分の目の前の思考を「たどる」のだが、それは他人に見えない対象である。〉[39]

他者がこちらを見ている目の背後にある思考・意志・欲望・思い出はすりぬけていく。「囚われの女」は、話者の言うように、正に「逃げさる女」なのである。これは倒置の空間的表象なのである。

テクストの翻訳及び註

テクストは Marcel Proust, À LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU, Gallimard 三巻を用いた。以下、RTP と略記する。邦訳は「スワン家のほうへ」は、築摩書房版・井上究一郎氏のもの、「囚われの女」は、中央公論社版・鈴木道彦氏のもの、「逃げさる女」は、この小論での引用部分については異同がない「消え去ったアルベルチーヌ」として訳されている、新潮社版・生島遼一氏のものを使わせていただいた。

〔註〕

1) Roland Barthes, UNE IDÉE DE RECHERCHE Paragone, Octobre 1971.
2) PTP, III, p. 30.
3) RTP, III, pp. 330–331.
4) RTP, III, p. 140.
5) RTP, III, p. 61.
6) RTP, III, p. 402.
7) RTP, III, p. 12.
8) RTP, III, p. 10.
9) RTP, III, p. 165.
10) RTP, III, p. 128.
11) RTP. III, p. 29.
12) RTP, III, p. 131.
13) RTP, III, p. 169.
14) RTP, III, pp. 172–173.
15) RTP, III, p. 20.
16) RTP, III, pp. 75–76.
17) RTP, I, p. 183.
18) RTP, I, p. 10.
19) RTP, I, p. 13.
20) RTP, I, p. 27.
21) RTP, I, p. 12.
22) RTP, I, p. 33.

23) RTP, I, p. 35.
24) RTP, I, pp. 35-36.
25) RTP, I, p. 36.
26) RTP, I, p. 38.
27) RTP, III, p. 91.
28) RTP, III, p. 335.
29) RTP, III, p. 345.
30) RTP, III, p. 170.
31) RTP, III. p. 386.
32) RTP, III, p. 75.
33) RTP, III, p. 157.
34) RTP, III, p. 177.
35) RTP, III, p. 358.
36) RTP, III, p. 359.
37) RTP, III, p. 476.
38) RTP, III, p. 70.
39) RTP, III, p. 181.